

# 奥さんの家出

国枝史郎

青空文庫



年増女の美しさは、八月の肌を持つているからだ。

ああ小径には凋しおるる花

残のこんの芳香を上げている。

「よろしゅうございます、お話ししましょう。が、それ前に標語を一つ、お話しすることにしたしましょう。」

『心にゴロン棒の意気を蔵し、顔に紳士の仮面をくつつけ、チャップリンの足どりで歩いたら、人生めったに行き詰まらない』と。

……私のための標語なので。……で、お話しいたしましょう。聞いて下さるでしょうね、お嬢さん。……あッ、それ前にもう一つ、勿論貴女はお嬢さんでしょうね。……で、お嬢さん、お聞き下さい、構いませんとも、お話ししますとも。……つまり何んです、何んでもないので、彼女——あなた私の奥さんですが、家出をしてしましたのでございますよ……」

×

「二銭！」

「はい」

二銭を出し、私は遊園地の木戸をくぐった。約一間歩いたらしい。と、ちっちゃいもくき木橋ようがあつた。幅三尺、長さ五尺、川に

は水なんか流れていない。でも矢<sup>や</sup>つ張<sup>ば</sup>り渡らなければならない。

左はお城の崖である。晩春の草が靡<sup>なび</sup>いている。笹がひそかに音立てている。黄色い花！ たんぽぽである。

少し行くと二対の鞦韆<sup>ぶらんこ</sup>！ 女中さんが子供を乗せている。若い楓と若い桜、日光に肌を炙<sup>あぶ</sup>っている。

右手には外濠線の軌道がある。××へ行く電車の軌道である。軌道の向う側は高い崖、崖の上には家並<sup>やなみ</sup>がある。家並の向うは往來なのである。塵埃<sup>ほこり</sup>と人間と色彩と、事務所と印刷所と弁護士の家と、そうして肉屋と憲兵隊本部……などの立っている往來である。

遊園地は外濠の中にあつた。崖と崖との底にあつた。あるもの

といえは静寂であつた。可愛<sup>かわ</sup>い色々の設備であつた。

ブラブラ歩いて行く青年であつた。——私はブラブラ歩いて行つた。

と、二頭の木馬があつた。だが、たアレも乗っていない。可哀  
そうな可哀そうな相手にされない木馬！ 四角な箱が一つあつた。  
グルグル廻わる箱なのである。奥さんが坊ちゃんを連れて来て、  
その坊ちゃんを夫<sup>そ</sup>れへ乗せて、廻わせば廻わる箱なのである。廻  
転箱とでもいうのだろう。遊戯の道具の一つなのだろう。だが、  
この箱も可哀そうだ。たアレもたアレも乗っていない。

半分咲いている山吹の叢<sup>むら</sup>、三分通り咲いている躑躅<sup>つじ</sup>の叢、あつ  
ちにも此方<sup>こっち</sup>にも飛び散つていた。

また鞆鞆が出来ていた。子供専門の遊園地なのである。鞆鞆ばかりがあるのである。

長方形の硝子箱——と云つても勿論一方だけが、硝子張になつていゝるのではあるが、もつたい勿体らしく置いてあつた。山鳥や鴨の剥製が、おおいば大威張りでその中に蟠踞している。

「なるほど成程この遊園地では、ありふれた鳥の剥製さえ、大切な大切な設備なんだろう」

ゴーツ！ 電車だ！ ××行き電車だ！ 緑色の車体、〰の番号、七八人の客が乗っている。どうぞ彼等の航海に、——全く航海に相違ない、××までつづいている新緑は、波というより云いようが無い。……で彼等の航海に、どうぞ平和がありますよう。

いや全く××電は、時々軌道から外れるというから。――

また青年は――私のことだが、ブラブラ先の方へ歩いて行つたと、若い楓。若い桜。

と、金網を張り詰めた、六角形の鳥籠があつた。高さ一間に、周囲三間、そんなにも大きな鳥籠なのに、鳩ばかりが巢食つて  
いる。

数にして十羽である。

おお神よ、この遊園地は、それでは貧しいのでございましょうか？

クツ、クツ、クツ、鳩の声だ！ 佇んで見ている私の方へ、翼を揃えて集まって来た。



何か呉れるとでも思ったのだろう。

餌物を惜しんだからでは無い。買う金が無かったからでもない。  
ふところ懐中手を出すのが大儀だったからだ。いや夫れからもう一つ、  
うれい愁に沈んでいたからだ。……で、私は呉れなかった。

若い楓、若い桜、半分咲いた山吹の叢、三分咲いた躑躅の叢、  
 あつちにも此方にも飛び散っている。

また歩いて行く青年であつた。私はノロノロと歩いて行つた。

## 二

また鞞鞞！ 一対の鞞鞞！

その横に すべりだい 台！

だが誰もこつていない。

ゴーツ、××電だ！ 行つて了つた。

で、後は静である。渡つてゐるのは微風である。

若い桜が沢山ある。みじめなことには一束の花が、葉に包まれて咲いている。

季節の祭礼は過ぎたのに——花の盛は過ぎたのに、——古ぼけた思想を後生大事に、守つてゐるヤクザな思想家のように、どうして何時迄も過去を夢見て——あつた日の貧弱な全盛に縋すがつて、獅し噛がみついてなんかいるのだろうか？

廃嫡された鳥小屋があり、その前に遊園地の番人の家が、切張

だらけの時代食じだいばんだ障子を、新時代の光に——初夏の日に——骨を曝さららして立っていた。

この頃から私は感付いた。

「不良青年がつけているな」と。

だが本当を云う時は、遊園地の木戸をくぐった時から、不良青年につけられていることを、ぼんやり乍ながらも、感付いていた。

ボヘミヤン・ネクタイ、合あいオーバ、（少し穢よごれた流行色の薄茶）それから羅紗の合帽子（少し穢れた流行色の薄茶）手には杖ケツ、足には赤靴、栄養不良らしい蒼黒い顔、唇と来たら鉛色である。——  
—そういう動物がつけていた。

間もなく私の知ったことは、私をつけている不良青年は、一人

では無いということであった。幾人もつけているということであった。

と云う証拠を発見したのは、番人の家まで来た時である。

鉛色の唇をした不良青年が、持っていた杖ケンをヒョイと上げて、或る方面へ夫それとなく、合図めいたことをしたからである。

「ふん」と私は鼻を鳴らした。「知ってるよ、知ってるよ、感付いているよ」

関わりとうとはしなかった。

私はノロノロと歩いて行った。

後からノロノロとついて来る。

「知ってるよ、知ってるよ、感付いているよ」

そうして私はこうも思った。

「こんな俺のような服装をして、こんな遊園地を歩いていたので、餌食にしようと考えて、彼奴等きやつが後をつける筈だ。もうもう是これは当然だ」

——ままにするがいいさ——こう思った。

——勝手に餌食にするがいいさ。

——それで君達が生活くえるなら。

生活るかね！ 生活るかね！ ……セセラ笑いたいような気持ちもした。

いや実際こぢんまりとした——そうしてひどくひっそりとした——散歩客が殆どほとんどいないので——寂しい迄の遊園地である。

ここで悪事を働いても、滅多に騒ぎにならないだろう。

私は用心しないことにした。

で私は依然として、ノロノロ歩いて行く青年であった。

「おや、変なものが立ってるなあ」

が、仔細に見なくとも可かった。そうして大して変なものでもなかつた。

四方金網で張り廻すわされた、水すいきん禽小屋に過ぎなかつたのだか

ら。とはいえ小屋の頂いただきが、——その高さ約二間、（名古屋を見る

ことは出来なかつたが、幅一間半、奥行二町、云い古るされた形容詞だが、鰻の寢床を想わせるような、この遊園地全体を展望するには頃加減の）そんな展望台になっていたのだから、矢つ張り

「変なもの」と云つてよかつた。

コンクリートで造られた瓢箪池、その池の中の濁つた水、そこに浮いている二羽の鴛鴦おしどり、そこに我鳴がなっている二羽の鷺鳥がちよう、水禽小屋にいるものといえ、ざつとどこか文字通り、四羽の水禽に過ぎなかつた。

「咎とがめては不可いない咎いめては不可けない、入場料は二銭なのだ。二銭を標準にして見る時は、この水禽小屋も四羽の水禽も、立派な見世物と云わなければならぬ」

私はこんなことを思い乍ら、水禽小屋の前に立っていた。

「価値以上のものを需もとめるところに、文明の崩壊があろうと云うものさ」

こんなことも考えていたようである。

だが私はこの小屋の前で、実際実際二銭以上の、素敵も無い高価な獲物を得た。

水禽小屋の横の方に、一脚のベンチが置いてあったので、休もうとして腰かけた時、若い美しい女の人が、向うの方からやって来て、軽く私に挨拶して、同じようにベンチに腰かけて、お天気の話からはじまって、ひどく懇意になったからである。

×

「彼女——私の奥さんですが、家出をしてしまったのでございますよ」



で、私は話しつづけた。――

「罪はこの私にあつたようです。あんまりご披露をし過ぎたので、友人が云いましたつけ、『奥さん話』を書くもいいが、あんまり書くと虫が付くぜ、彼奴あいつの『奥さん』を見に行こう、――な」と云つて見に行く連中が、沢山出来たら何どうするね。ロクでも無い間違いが起ろうぜ。で、あんまり書かないがいい、と。……  
そうも書いたんじゃないやありませんよ、そうでございますね、三つぐらいでしょう。『××××』と『△△』と、ええと夫れから『□□□□』と。そうです、精々三つでした。ところが何うも今

から思うと、このもう三つが悪かったので、二つにして置けばようございました。何故？ とお訊きになるでしょうね。さあ何う云つたらよろしいやら、兎とに角かくどうも悪かったので、虫がついたのでございますよ。しかも其そいつ奴が不良青年なので、しかも奥さんより年下だったので、それなのに彼女は——奥さんですがね、誘惑されたのでございますよ。……それは随分私としては、警戒はしたのでございますが、けつきよくは失敗に終わりました。大変も無い凶ずうずうし々敷い奴で、『開ける開ける！』って吠どな鳴るんです。面会謝絶の札を張つて、門口を閉じて置きますとね。『這はい入っちゃア不可ません、逢いません』勿論私は断るんですが『開けて下さいよ、開けて下さいよ』懇願なんかするんですね。仕方がないじ

やアありませんか。で、止むを得ず開けるんです。と、どうでしょう不良青年は、奥さんの側へへばりついて、どうして動こうとしないんです。——ナーニ美男子じゃアありませんでした。薄っぺらい存在でした。何か取柄がありましたか知らし？ あッ、そうそう一つありました。不快至極の取柄でしてね、我慢出来ない程の道化た態度！ こいつ一つでございましたよ。だが何より困まったことには、そういう道化た態度というものは、見様によつては無邪気にも見え、また可愛らしくも見えるもので。で彼女は——奥さんですがね、後者の見方をしたようなので。いやはや、いやはや、何んと云つたらよいやら。……で、誘惑されたんですなあ。……あッ、それからもう一つ。これは取柄というよりも、病

氣と云った方がいいようですが、変な癖を持つて居りましたよ。一口に云うと変態性欲で、つまり何んです、つまり斯う<sup>こ</sup>なんで、奥さんの着物が好きなんで。で、奥さんが風呂へ這入っていると、脱ぎ捨てた奥さんの衣裳なんかを、畜生！ 指の先で探るんで。そうして奥さんの出て来る迄、どうしても其奴を止め<sup>や</sup>ないんで、全く私は赧<sup>あか</sup>くなりました。成らざるを得ないじゃありませんか。だが此<sup>こいつ</sup>奴も見ようによつては、『深い愛情』にも見えませぬなあ。で、奥さんは（何が奥さんだ！）そういう見方をしましたんで。つまり好意ある見方をね。馬鹿な話で、何が好意でしょう。爾来！ そうです、爾来ですよ、私は一切好意ある見方を、忌避することにしたしました。危険ですからなあ、好意ある見方は！ 付

け込む輩がありますので、その好意ある見方にですよ。……凶々敷いっただらありませんでした、奥さんを誘惑した不良青年はね。……どうです私達夫婦と一緒に、ご飯を食べようっていうのです。何んの其奴が奢るものですか、私の家の食物を、私の家の食卓で、私達と一緒に食べようというので、とても下等の食べ方でした。クツクツと喉を鳴らすんで。ペチャペチャ唇を鳴らすんで。大して大食でもありませんでしたが、三度三度食べようというんですからねえ。……これには奥さんも参ったようでした。『もつと上品にお上がんなさいよ』一度云ったことがあったようでした。『一緒に食べるのも仕方が無いが、ガツガツした真似は止めてくれたまえ！』とうとう私も云ったことがあります。と、何うでし

よう、面白くもない、私がそう云うと云うことを聞かずに、奥さんが然そういうと聞くんです。まあまあ夫れも我慢しましょう、どうにも我慢出来ないのは、それを奥さんが得意がることで、『ね、可愛いじゃアありませんか、あたし妾の云うことを聞くんですもの』——つまり斯ういう心持から、奥さんは誘惑されたんですねえ。……ところが彼奴は、不良青年ですが、とうとう遂々こんなことを云い出しましたんで『一緒に寝ましょうよ、三人揃って』——勿論これだけは奥さんも、はつきりと断わつて了いましたよ。『いけませんよ！ 行つて下さい！』——私といえども云いましたので、『うしやアがれ！ 消えてなくなれ！』……で、ポンです！ ピシヤンです！ ポンと部屋からつまみ出して、ピシヤンと門の戸

を立てたんで。当然ですよ、こんなことぐらい！ 閨を犯そうと  
 いうのですからね。赧くなるじやアありませんか。いやはや、い  
 やはや、赧くなりましたよ。……ところが其奴は執念深く、可成かな  
 り、そうです、相当長く、門口に立つてせがむんです、『開けて  
 下さいよ、開けて下さいよ！』——何んの私が開けますものか。

すると其奴は怒ったように『何んだ何んだ！ 開けろ開けろ！』  
 強迫きょうはくがましく呶鳴るんですね。何んの私が開けますものか！

『開けて下さいよ、開けて下さいよ！』すると今度は懇願です。  
 腹が立つじやアありませんか、すると奥さんがこう云うのですか  
 らね。『気の毒ね、開けてやりましょうか』『彼奴にだつて下宿  
 はあるんだろう！ うっちゃって置けよ、馬鹿げている！』『で

も気の毒よ、気の毒ね』『その寛大がよくないのだ』それから私はやつつけました。『行つてくれ、行つてくれ！ シツ、シツ、シツ！』まるで動物でも追つ払うように。……だが結局負けました。奥さんが家出をしたんですから」

話し乍ら私の感じたことは、私の側にいるお嬢さんが、体を寄せてくることであつた。そうしてお嬢さんの綺麗な手がチヨイチヨイ私へさわることであつた。

——知つてる知つてる知つてるよ……私は事実知つていたのであつた。

で、東を向かなかつた。

そつち其方にお仲間が居たのだから。



ふん、ぐるだな！ 解っているよ！

だが私はこだわらなかつた。

平気で体を受けつけた。そうして平気で手も取らせた。

—— 尽くせよ、勝手に、貴女の媚態を！ それで貴女と貴女との仲間が、生活することが出来るなら。……つまりこういう腹であつた。

「ええ今日でした、先刻さつきでした、昼飯を食べると直ぐすでした。奥さんが家出をしましたのはね」

云いつづけようとしたのである。だが私はベンチから立った。何うやらお嬢さんの後おくれげ毛けが、何うやら私の頬の辺に、もつれかかりはしないだろうか？ こんなような感じがしたからである。

——接吻キッスばかりは見合わせよう——こう思ったからである。

——いくら何んだって体面がある。——こうも思ったからである。

——それにさ第一恥しいよ、そいつを公衆に見られてはね。——  
——こうも思ったからである。

——それはさ酷ひどく悪趣味だよ。——云う迄も無くこうも思った。  
「ね、お嬢さん——お嬢さんでしょうね……ひとつ散歩をするこ  
とにしましょう」

(眼限めくまの似合うお嬢さんよ!) 心の中で毒吐どくづいたのは、果して私  
の不遜だつたらうか?

立ち止まった処ところに檻とこがあつた。

熊が一匹遊んでいた。ノツソリ、ノツソリ、ノツソリ、ノツソリ、ノツソリ。……

並んでもう一つ檻があった。

猿が六匹遊んでいた。ノツソリ、いやいや、そうでは無い。敏活に遊んでいたのである。

猿の檻に並んでタラタラと、幾個かの檻が列をなしていた。

大変悠長ではあったけれど、私とそうしてお嬢さんとは、一々檻を覗いて見た。

一つの檻には鸚哥いんこがいた。それもたった一羽だけ。一つの檻には兎がいた。それもたった一匹だけ。もう一つの檻には猿がいた。親子の猿と、一匹の赤ん坊と、そうしてもう一匹の食客めいたの

と。もう一つの檻には紅雀がいた。それもたつた三羽だけ。もう一つの檻には鳶がいた。それもたつた一羽だけ。（空を睨んで、威張りまくって、さも、偉いゾーツと云つたように）もう一つの檻には孔雀がいた。（いや孔雀には似ていたけれど、やや貧しげな鳥であつた）それが三羽腹這つていた。日の光の射さない砂の上に。

で、これでお終いなのである。

いやいや夫れ等の檻の列と、向かい合つた所の反対側に、更に一列の檻があつた。

大変悠長ではあつたけれど、私達二人は覗いて見た。

## 四

一つの檻には二羽の七面鳥！ まあまあ是は結構である。

一つの檻にはモルモットが一匹！ まあまあこれも我慢しよう！

それに続いてちつちやい箱が——いやいや矢つ張り檻なのであるが、四つ並んで肩を揃えて、兵隊さんのように立っていた。中に這入っている生物いきものが、一つ残らず兎だったので、私は意地にも笑つて了つた。

「この遊園地の入場者には、兎が大変お気に召すと見える」  
だが私は脅おびやかされた。

最後の立派な檻の中に……ナーニ、それとて鳥小屋なのであるが、その鳥小屋に飼われている、おびただ夥しい数の鳥を見た時。

「二、にわとり家鶏！ 二、家鶏！」

神よ！ いやさ、悪魔でも呼ぶよ！ そこには家鶏が飼つてあつたのである。珍らしくもない普通の家鶏が！

「この遊園地の入場者には、家鶏さえ見世物になるものと見える。  
尤も<sup>もつと</sup>」と私は自答した。「そうはいつでも家鶏という鳥は、随分

立派な鳥だからな。……ただ何処にでも沢山いて、小憎らしい程卵を産んで、毎朝毎朝とき関の声を上げて、平凡主義を發揮するので、それで珍重されない迄さ。大量製産的の鳥であり、高踏派的の鳥で無いからさ、それで珍重されない迄さ。……だが、何うにも、

理由無しに、こんなに可笑おかしいのは何故だろう？」

が、すぐ私は後悔した。

札が釣るされていたからである。

「寄贈者、名古屋市東区武平町三丁目、

鶏十五羽、殿村絹子殿」

鳥小屋に釣るされてあつたのである。

「ああ然そうか」と胸に落ちた。「綺麗なお嬢さんか、綺麗な奥さんか、兎に角一人の善良な婦人が、この家鶏を寄贈したのだ。この遊園地の経営者が、買って飼っているのでは無かったのだ。寄贈品なら文句は無いさ」

そこで私は改めて、兎だのモルモットだのの檻を見た。

兎の檻にもモルモットの檻にも、寄贈者の名が記してあった。

「みんなみんな寄贈品なのか。いや大変結構だ、いや実際名古屋市には、動物を愛し遊園地を愛する、善良な婦人が多いらしい」

——それに反して俺の奥さんは、俺をすてて、家出をしてしまった！

「ねえ、お嬢さん」と話しかけた。「コテン、さいさい、アツアツアツ……こう云って家出をしましたので、彼女——私の奥さんですがね。詳しくお話しいたしましょう」

で私は話しつづけた。

だが充分用心して、東の方へ向かなかつた。

狙っているということ、ちゃんと知っていたからである。



だが時々背後は向いた。

鉛色をした唇の、不良青年が杖をもつて、その杖で時々合図をして、つけて来るのを知っていたからだ。

「どうしてああもあっさりど、家出することが出来るものでしょう？ まったく私には不思議です。婦人というものは然ういうものでしょうか？ もし然ういうものでしたら、私は婦人全体に向かつて、拳を振るかもしれないなあ。いや少くもボタンは締めます。勿論胸のボタンですよ。……そうは云つても婦人というものは、好ましいものでございますなあ。特に私の趣味から云えば、年増の婦人が好ましいので」

ここで私は詠嘆的に云った。

「年増女の美しきは、八月の肌を持つているからだ！」

更に一層歌うように云った。

「ああ小径には凋るる花、残んの芳香を上げている。——で、彼女——奥さんですがね、そういう女だったのでございますよ。結構な美しい婦人だったので」

だが私は考えた。「少し云い過ぎはしないかな？　奥さん讚美が例によつて、しつっこくなりはしないかな？」構うものかと思ひ返えした。「云つてやれ云つてやれ、云つてやれ！」そこで私は<sup>か</sup>狩り立てられたように、云い得べくんば物に憑かれたように、<sup>いや</sup>厭らしいまでに能弁に、こんな<sup>あんばい</sup>塩梅にまくし立てた。

「眼！　ね、眼がよかつたので！　尤もその眼の美しさに就いて

は『××××』というヤクザの作で——なアに、立派な作でしたよ、その作で描写したのですから、ここでは細描写ははぶきますが、一口に云うところなるので『彼女は其眼を持っていたため、そうして其眼を活用したため、「雌めん」とならずに「女」となった』と……どうしたって女というものは、どうしたって顔の造ぞうさく作の中に、特別に一つ美しいものを、保持していなければ不可いませんなあ、そうして夫れを活用し、愛人、もしくは良人おととの心を、ごまかさなければ不可いませんなあ。で、然ういう美しいものを、不幸にも保持していない女や、乃至ないしは活用出来ない女は、古い云い来りの譬ひ喩ゆですが、（女）では無くて（雌）ですなあ。……ところが洵まことに有難いことには、私の奥さんは持っていましたので。そ

うして活用もしましたので、くどいようですが、眼！ 眼をね！

……私といえども憂鬱になります。と云うより生活の九割迄は、憂鬱なのでございますよ。紅茶の入れ方が不味まずいと云つては、矢張り憂鬱になりますので。ところが何うでしょう奥さんですが、その不味く入れた紅茶なるものを、眼だけで美味しいものに変えますので。パチ、パチ、パチ、しば叩くので、その大変美しい眼を。そうして私へ云いますので。『おいしいわね、この紅茶！』そうしてもう一度パチ、パチ、パチ！ と、何うでしょう、不味い紅茶が、旨うまく飲めるじゃありませんか。……だが」

と私は憂愁に云つた。

「そんなにもよい眼を持っていたので、奥さんは誘惑されたんで

すよ。彼奴、さよう、不良青年ですが、胸の悪くなる程いつもい  
つも、奥さんの眼ばかり見ていましたっけ。家畜が主人の眼をう  
かがい、そうして夫れに媚びるようにね。……で、こうも云えま  
すなあ、奥さんの美しい眼なるものが、不良青年を誘惑し、誘惑  
された不良青年が、今度は奥さんを誘ったのだと。いやはや、い  
やはや、相違ありません。誘惑したものは誘惑されますよ」

## 五

私は当然意識していた。

非常にお嬢さんが濃艶に、申分の無い可よい形ポーズで、話して歩いて

いる間中、私に腕を抱いか込んだり、私の肩へ手を置いたり、私の胸へ寄よりかかったり、絶えずコクコクうなず頷いて、私の話へ合槌を打ったり、同情して眉をひそめたり、引つつづめて云うと媚態を尽くして、私の心に取り入ろうとして、努力していたということ。  
「一体この女は何物だろう？」答えは恐ろしく簡単であった。

「間違いは無い。あの種の女さ」

「何故こんなことをするのだろうか？」その答えも簡単であった。

「他に何かがある、生活くうためさ」

「だってこんな白昼に？」「白昼だからこそ商売になる」

顔にも姿にも手の指にも、あざやかな輪廓を持っていた。そうして特別に横顔が可かった。（これこそ何より大切なことさ！）

陰影のキツパリした女であった。（だから大概身分は解る！）  
依然私はこだわらなかつた。彼女の自由になつていた。

とはいえ何うしても東の方へだけは、私は顔を向けなかつた。  
彼等の仲間がいるからであり、それが怖かつたからである。

遊動円木、機械体操、廻転箱、また鞞、……そういうもの  
揃つている、小運動場の一面へ来た。

咲きはじめた藤の棚があつた。

新樹が夫れらを引つ包み、大切そうに保護していた。

何方どっちを見てもひとけ人氣が無い。

十日前だつたら大変だつたらう。桜の花を見る人で、ごつた返  
していただらう。潮の引いた後は寂しいものだ。

小運動場から二十歩あるき、またベンチへ引つ返えした。展望台を兼有した、水禽の檻まで来たのである。

「一番ここが可さそうだ」この考えは誤りはあるまい。（お嬢さんのためにも私のためにも、そうして狙っている彼等のためにも）腰をかけたベンチのもたれを越して、こつそり背後うしろを眺めたのは、鉛色をした唇を持った、不良青年の居り場所を、それと無く知りたかったからである。

ちやんと背後に立っていた。と、ヒョイと杖を上げた。また合図をしたのらしい。

「どうやら危険は迫つたらしい」

私は懐ふところ中へ手を入れた。



こんな場合に遭遇あった時、護身用の利器あるなしの有無は、致命的に大切なことである。防げるだけは防がなければならない。

「まず大丈夫だ、利器はある。こいつさえ旨く用いたら、あべこべこっちに此方が勝利を得る」

「『コテン』というのは斯ういう意味なので……」私はお嬢さんへ話し出した。「頭を下げる意味なので、いや寧ろむし夫れは形容詞なので、ね、そうでしょう、頭を下げる、その下げ方を音で云うと、コテンと云えるじゃありませんか。で、奥さんはそう云うので。奥さんの拵えた形容詞なので。ところで、『さいさい』は何かというに、左様なら左様ならの略語なので、左様ならが略されて『さいなら』になり、『さいなら』が略されて『さい』にな

り、二つ続けて『さいさい』になります。これも奥さんの造語なので。さて最後の『アツアツアツ』……これには多分の説明が入ります。西菊井町にいた頃でした。そこに住んでいた頃でした、可愛い子供が遊びに来ました。大変大変になつきましてね、一度遊びにやって来ると、中々家へ帰らないのでお母さんが、心配をするでしょう、で奥さんが云うのでした『さあ雪やお帰りなさいよ』すると可愛い子の雪ちゃんですがね、困まったような顔をして、でも帰らなければならぬでしょう、畳へ額をおっ付けて、つまりお辞儀をするんですね、それから顔を上げるんです。と、その顔が充血して、もつと可愛らしく見えるんですがね、その顔を上<sup>うえした</sup>下へコクコクして、そうして『アツ、アツ、アツ』と

云うのです。勿論意味は解りませんが、兎に角お別れを告げるのだと、そういうことだけは解りますので。その『アツ、アツ、アツ』が<sup>とて</sup>迎も可愛く、奥さんの好に<sup>このみ</sup>合つたんです。で、それを使つたのでございますよ。ようございますか、お嬢さん、以上三つを続けると、『コテン、さいさい、アツアツアツ』こんなようになるじゃありませんか。ナー二何んでもありやアしません、別離を告げる意味なので。ところが私の奥さんですが、鳥<sup>ちよつと</sup>渡用達しに行く時でも、それをやるのでございますよ。『コテン、さいさい、アツアツアツ』……無邪気で優しくて可いのですが。しかし何うも、しかし何うも……」

ここで私は憂鬱になった。

「兎にも角にも家出です。重大問題じゃありませんか。冗談事じゃありませんよ。だのに奥さんはそんな時にも、それをやって家を出て行ったので『コテン、さいさい、アツアツアツ……考えざるを得ませんなあ。』」

かかわりの無いのは水鳥であつた。

水禽小屋の鷺鳥輩であつた。

ガツ、ガツ、ガツ！ 啼いていやがる。

と、その中の一羽であるが、その長い頸を湾曲させ、嘴を水へ突っ込んだ。ブルブルブル！ 振ふるつたのである。その長い頸を振つたのである。水が飛んだのは云う迄も無い。と、首をヌツと上げ、ガーツ、ガーツ！ 啼き出した。

と、もう一つが臆面もなく、その長い頸を湾曲させ、嘴を水へ突っ込んだ。同じように水を飛ばせたかと思うと、ヌツと首を高く上げ、ガーツ、ガーツ！ 啼き出した。

こんな鈍感なけだもの獣つてないよ。

ななめ

斜に日光が射し込んでいる。池から陽炎が立っている。

それを見ている私達であつた。私もお嬢さんも黙っていた。で、ひっそりと静である。

何時まで続く静けさであろう？

しかし二人とも黙っていた。

だが何うしたら可いのだろうか？

お嬢さんの綺麗な細っこい、その癖その割に力のある、一本の

腕が緩く廻わり、私の肩の一方へかかり、私の全身を身近く引き寄せ、そうして一方別の手で私の頬を野蛮に抑え、ねじ向けようとしているのを。

いよいよ危機は迫ったらしい。

「引っこ抜くかな、引っこ抜くかな」

落ちかかろうとするのであった。そのお嬢さんの接吻キッスなるものが。

ねじ向けられようとしているのであった。私の顔が東の方へ。だから何うしても利器を抜いて、彼女と彼女の仲間との、姦策なるものを防ぐことによつて、私の方が勝たなければならない。

無難に然うして滑らかに、私の試こころみは成功した。

利器——書籍ほんさ！ 何んでもありやアしない。最近私が発行した、○○という創作集なのさ、それを懐ふところ中から取り出して、私自身の顔へ宛て、好んで東へ顔を向け、そうして創作集の裏側で爆発するように笑ったままである。

思う通りの結果となった。

手近の東の方角にある、外濠稲荷の木立の中から、

「おや、何んだ！」

という声でした。

つづいて背後うしろから声でした。

「肝腎な所を！ 目茶目茶だ！」

鉛色をした唇を持った、不良青年の声である。

肩にかかっていたお嬢さんの手が、ダラリと下つたのは云う迄もない。

「ね、もう可いじゃありませんか」

お嬢さんの感情を傷付けないように——彼女といえども商売があり、食つて行かなければならないのだから、——私は充分おだやかに云つた。

「もうそろそろ日も暮れます。仕事だつて出来ないじゃありませんか」

その時犬の吠声があった。

で、私は展望台を見た。

私の奥さんと情夫とが、互にしつかり抱き合つて、展望台に佇



んで、私の方を見ているのを、私は平然と眺めやった。

「二兎を射たのさ、何んでもありやアしまい」

外濠稲荷まで来た時である、帽子を取つて挨拶をした。

「キネマ会社の技師諸君、失望したでしょうね、大おおうつし写は！」

で、私は遊園地を出た。

市街まちの往来は雑踏していた。所謂いわゆるラツシユアワアであつた。

「鉛色の唇の先生が、監督なんだから恐れ入るよ。……よく西洋にはあるやつだ、気取つた青年へ女優をけしかけ、エロチツクの振舞いをさせて置いて、それをこつそりヒルムに撮つて、会員だけで見て楽しむ。ふむ、そんな物に引つかかるものか！ いやはや、いやはや、日本にも、よくない模倣が現われたものさ。……

ダブダブしたズボン、袖の広い上衣、そうして其上トルコ帽、いやはや、いやはや、俺の姿は、うってつけにそれに間に合いそうだ。……そうしてあそこの遊園地！ 道具建てだけは出来ていたつてもなさ」

## 六

奥さんが家出から帰って来たのは、其夜ちよとばかり更ふけてからであつた。眼をいくらか泣き膨はらしていた。

「見ていたわよ、ひどい貴郎ね。熱があるのよ、抱いて頂戴。コン、コン、コン、……コン、コン！」

ノラが風邪を引いて帰って来た時、もしヘルマアに親切があったら——彼は充分親切者だ——介抱したに相違ない。まして私のノラさんは、新思想に誘惑されることによつて私を捨てて行つたのでは無い。「ドン」……私達の飼犬だが、ちいぢやい時に貰つて来たので、座敷の上で先ず育て、十月になつたので庭へ下ろすと、可愛がつてくれた奥さんを慕つて、上げて下さいよ、上げて下さいよ！ こう云つてせがんでワンワン吠えて、座敷へ上げると奥さんと狂い、一緒にご飯も食べようとするし、一緒に三人で寝ようともするし、そうして是は忠実からであるが、奥さんの衣裳の番もするし、そういう青年の「ドン」という犬と——いや實際犬というものは、十月経てば青年ということが出来る。——で、

私とささやかな事で、何んでもないいさかいをやったため、その「ドン」を連れて家を出て、遊園地へ行つて遊んでいる中、私の巫山戯た様子を見、気を悪くして晩までいて、寒い夜風に吹かれたため、風邪を引いて帰つて来たまでである。

だからさ、介抱する必要があるよ。

「床とこをお取りよ、アスピリンをお飲み」

こう云つてから考えた。「八月の肌を持った奥さんは、少し今夜は熱っぽいだろうが、しかし恐らく私のために、二倍の音楽を奏するだろうよ」

×

中京喜劇キネマ会社から、手紙の来たのは数日後であった。

「K先生とは少しも存ぜず、とんだ失礼をいたしました。が、フィルムは非常に完全に製作されましてございます。甚だご迷惑とは存じますが、掛けた費用を捨てるも惜しく、公開することに致します。悪<sup>あし</sup>からずご諒承下さいますよう。事実小会社でございますので、費用を捨てるのが洵に惜しく……」

こういう意味の文面であつたが、私はその先を読まなかつた。婉曲な強請<sup>ゆすり</sup>であるからである。

だが私はゴロン棒の意気で、直ぐに皮肉な返辞を出した。ただし文体は紳士的にした。仮面を被<sup>かむ</sup>つて書いたのである。

「ご自由にご公開なさいますよう。あの美しい女優さんと、この私との接吻の場面を、大寫にした筈でございますが、これは失敗

なさいました筈で、私の顔が映つる代りに、私の著書が映りました筈で。寧ろ公開は望むところでありませう。私の名と然うして著書の題とが、大きく映つるのでございますから。それに私は入念に注意し、たしか一度もレンズの方へ顔を向けなかつた筈でございます。で、あれが公開されましたも、私が私だということは、恐らく誰にも知れますまい。のみならず、公開されることによつて、却つて私は得をいたします。著書が広告されますので。沢山売れることでございますよう」

——誰が馬鹿らしい金を出して、そんなヒルムなんか買い取るものか。

×

貞淑な奥さんがこの事件以来、一層貞淑になったことは、あまりに当然な事であつた。展望台から見ていたのだ。私とお嬢さんとの動作だけは、すっかり悉皆見えたに相違ない。然し会話は聞えなかつたろう。少し間隔が離れ過ぎていたから。

奥さんは思つたに相違ない。「まだまだ家の坊やさんは——それは私への愛称であるが——美しい若いお嬢さんに思い付かれる可能性があるわ。油断は出来ない油断は出来ない」と。

「ところであの女優は何うしたろう？」

その後も時々思い出した。

「十九、二十、そんなものだつた。嗜好このみに合わない年恰好さね。

……満開の美が少しく凋れ、なお尚残んの芳香を、小径いっぱい満

たしている、そういう花の美しさ、そういう花を連想させる、二十五歳から少し出た、年増女で無いことには、俺の趣味性には合わないってものさ、季節から云ったら八月さ！ 夏から秋へ移ろうとする、その一線を画している、そういう年頃の女がいい。：で若<sup>も</sup>しあの時のあの女優が、ひよつとして然ういう女だったら、俺といえども危険だったかも知れない。ああも平然とチャップリン式に、歩き廻わることには出来なかつたかもしれない」

（附記。どうも私はキネマに就<sup>つ</sup>いては殆<sup>ほとん</sup>ど知識がありません。で恐らく其点で、この作には欠陥がありましたしょう）







# 青空文庫情報

底本：「国枝史郎探偵小説全集 全一卷」作品社

2005（平成17）年9月15日第1刷発行

底本の親本：「新青年」

1927（昭和2）年7月

初出：「新青年」

1927（昭和2）年7月

入力：門田裕志

校正：北川松生

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 奥さんの家出

国枝史郎

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>